



令和元年度自然観察会報告 赤城山「粕川源流部遡上」

「ツツジ咲く火山の歴史を感じよう」

自然保護委員会 小池 寛 喜

五月二十六日(日)、総勢47名。
一般参加者33名+係員14名。

今年の観察会、天気は暑過ぎる位の当たり。期待していたツツジは気温変化の波を受け、花のトンネルを歩くという訳にはいかなかったが、地形観察は楽しめ、まずまずの成功である。関係各位の協力あってこそ。皆様、この度も誠にありがとうございました。



近年は参加者増加の傾向から、満足度を高めるための開催地選定は難しくなる一方である。今回のコースは、沢歩きを盛り込むことで個人では中々味わえない山歩きを楽しんでもらおうと企画した。しかし、登山形態の一つである沢歩きは、道がついていたとしても状況の変化が大きいなど、計画内に不確定要素が増える事から、大

所帯でのイベントには向いていない。開催地・コースを絞るにあたっては、委員会内で種々の対応策が論じられ、入念な下見を行って実施の運びとなり、無事終える事が出来た。
赤城山は、火山噴火予知連絡会が選定する111の活火山のひとつに数えられているが、常時監視対象の浅間山や草津白根山などと

違い、沢筋に有害ガスが滞留する危険性は指摘されていないことから、火山の生々しい痕跡を目の当たりにすることが出来る格好の観察エリアで、アクセスの良さも手伝い、尾根筋・沢歩き要素を盛り込んだ一日で十分楽しめるのだ。

さりとて、天候状況次第で危険個所に豹変し、コース取り次第で進退に窮する場面がある事を経験している委員会の面々の意見は厳しいものの、実現する為の引き出しが豊富なことは大変に頼もしい限りである。

今年のコース、粕川源流部は、尾根筋から関東平野を望め、眼下には上州の文化発展を支えてきた麦畑の広がりも確認する事ができる面白い場所である。またオトギの森では県の観光資源調査として山頂付近で温泉掘削した、まだまだ新しい遺構、沢筋では何の目的で掘ったのか分からない横穴などあり、参加の皆さまに興味を持って見て頂けた。

一般ルートにも紹介されている銚子の伽藍で大休止。フィックス・ロープを設置して滝の落ち口を覗いてもらっていたのだが、好

天に推されて次々と訪れる他グループの登山客との不意なトラブルを避けるために、早々にロープ回収する事になったのは意外であった。これには赤城山の楽しみ方も再び広がってきていると実感させられた。ただ何度かの下見の際に気掛かりだったのは、銚子の伽藍付近で出会った方の中に、行先や現在地点が分からない単独行者が多かった事だ。粕川源流部は携帯電話が通じないエリアが広く、登山の基本知識なしに踏み込むのは危険である。

今回の観察会は、沢歩きでのペースばらつきと安全管理を考え、募集対象を登山中級者とし、運営では4つの小グループ行動を基本として、各グループにリーダー&サブ・リーダーを置く方式を採用。重要な解説ポイントでは全員が集合、各グループ内でフォローするという形は今後の運営にも生かしていけるだろう。

一般参加者の構成は、50才未満0%、70才以上44%、平均年齢66才。これは募集対象を登山中級者としたことが大きく影響したと考えられるが、確かに足並みが良く揃って時間遅れも無かった。また、募集定員40名を割る39名の応募(5名直前キャンセル、1名係員要請)は参加を希望する方々が募集要項をよく見て考えた事を物語っている。

今回、医療面ではAEDを前橋市から借用、一般参加の看護師有資格者の方に救急係員として事前協力要請しておくなど体制も充実させてきました。係員すべてがボランティアの公募イベントであるにも関わらず、リスク管理の観点から見ても満足度を上げて行くにはまだまだ手法を探っていく必要がある。

岳連係員のスキルを活かして実施する「岳人ならではの自然観察会」を今後も多くの方々に楽しんで頂けることを願っています。

*ふるさとの山に登ろう

今回の観察会は、沢歩きでのペースばらつきと安全管理を考え、募集対象を登山中級者とし、運営では4つの小グループ行動を基本として、各グループにリーダー&サブ・リーダーを置く方式を採用。重要な解説ポイント



二〇一九年三月

群馬岳連救助隊活動報告

前橋山岳会 上原 祐一

平成三十年三月十日、土合山の家周辺にて救助訓練を行いました。今回の訓練はアバランチトレニング、特にビーコン操作に特化した訓練、また、雪崩現場でコマンドーとなる者を育てるシステムの訓練を行いました。

まずはビーコンの特性について町田隊長から説明を受けます。アナログビーコンを使い、

続いて、それぞれの実力を測るテストです。数十センチ埋まったビーコンを、20m先から一分以内に探し出します。誰も当てられませんでした。町田隊長の指示通りに動くと、一発でプローブがヒット。ポイントは、10m以下まではダッシュ、10m以下になったらゆっくり、5m以下になったら

ビーコンを雪面に近づけて向きを変えずに、縦横のファインサーチで正確な位置を出す。スパイラルプロービングは20cm間隔で均等にさしていく。この通りにやると皆がすぐに見つけることが出来ました。

それから3m以上の深い埋没ではどうなるかを体験しました。雪が少なくて深くは埋められないので、木にビーコンを吊るして試



プローブラインによる搜索訓練

思いきや、ビーコン反応のないものがもう一つ埋まると町田隊長。全員一列に並びラインプロービングを開始します。これも大人数で行うため、櫻澤副隊長の掛け声に合わせて「一歩前進、右、真ん中、左」を繰り返していきます。すると「ヒット」の声が無事に見つかりました。複数埋没ではい

た。

電磁場がどのように出ているかの説明。フォルスマキシマム、スパイクといった電磁場の注意点も教わりました。これからビーコン買うなら3本アンテナ！が良いですね。複数埋没の際には、複数の搜索に対応していないビーコンでも、マイクロサーチストリップ、サークルサーチといった搜索方法などもあるとの事。



Vコンベアーによる埋没者掘り出し

します。いつもなら「0.5」とか、「1.0」などとなる数字がなかなか低くなりません。低くならないのでどんどん移動してしまいます。移動したらしたで数字はさらに高くなります。深い埋没だからです。数字が低くならない時は深い埋没に気が付き、その中で範囲を特定しなければなりません。これも知っていかないと、永遠と低い数字を求めてウロウロしてしまうでしょう。

最後にいくつ埋まったかわからない想定での搜索、掘り出しまでのシミュレーションを行いました。

私はビーコン搜索隊です。いざ探し出すと、一つ見つけては次、また見つけては次と、なかなか消えきらないビーコン反応に戸惑い出します。また、ビーコン隊、プローブ隊、掘り出し隊と人数も多いため、人が入り乱れて混乱します。さらにはビーコンを全員受信モードに切り替えていたのですが、ビーコンの種類によって自動復帰で送信モードになっていたものもあり、反応が入り乱れていました。複数埋没ではいろんな大変さが重なり、五つを探し出すのにかなりの時間を要しました。終わりがと

一人の埋没の搜索は今までも行ってきましたが、慣れない複数埋没ではまだまだ訓練が必要の様です。冬山に出掛ければ、雪崩に遭遇するかもしれません。そしていざ搜索する立場となったときに何も出来なければ後悔するでしょう。今回の訓練で、搜索の際に指揮を取るコマンドーの役割が重要な事もわかりました。コマンドーとなる者がいなければ、搜索する人間が多くても、それぞれの役割分担がわからず混乱して、効率の良い搜索が出来ません。自分もそのコマンドーの役割をこなせるようになるよう、訓練を重ねていきたいです。

一年の締めくくりに

― 劔岳早月尾根 ―

前橋山岳会 飯 島 智 子

*8月11日は「山の日」です

「試練と憧れ」の石碑からスタートした春合宿前半、劔岳早月尾根。思い起こせば、昨春、前橋に人会し、岩登りから始まった一年。憧れで入会し、あまりの出来の悪さに試練の連続でした。いやいや、ゼロから教えてくれた会の方々の方が試練の連続だったのか。とにかく、自分の中で、「残雪の春合宿Ⅱ一年の締めくくり」という位置づけでした。この日に備えて、一週間前に吉本さんと鹿島槍ヶ岳鎌尾根に荷物

なので、少しでも成長した姿を見てもらいたいと、気合いも体力の準備もバッチリです。

駐車場のある馬場島から幕営予定地の早月小屋まで標高差一六〇〇mほど。先頭を歩く田村さんは、軽やかにすすいと急登を歩きます。後ろを歩く自分は、フーフト息を整えながらついていくのに必死。田村さんから「ずいぶん歩けるようになったね」と言われて、ドヤ顔で「先週も泊まりで山に

物を背負ったまま登ってきたばかり。メンバーは、田村さん、吉本さん、飯島、田村さんと村さんとの山行は久しぶり



日暈を眺めながら



山際に映える月

し、19時過ぎに就寝しました。

二日目

1時起床

2時45分

装備をつけて歩き

だします。

1時起床

つて、日

常生活で

はなかなかできません。

山のためだからこそ、起きられ

す。そして早起きした分、雪がし

まっ歩きやすく快適です。山際に美しい月が見え、幻想的な雰囲気の中、山頂を目指します。途中、傾斜が強い斜面が出てきて、ザイルを出してもらいました。トラバースや岩壁もあり、この一年間経験してきたことを思いだし、慎重に登ります。

7時登頂。いつかは登りたいと思っていた劔岳。しかも、残雪期。二年目以降かなって思っていたので、思っていたよりも早くきちゃいました。岩登りのセンスのなさにも自分もびっくりし、そして周囲もびっくりさせた一年前。歩きが下手くそだと気付いた半年前。それでも、続けてい

れば、少しずつだけ登れる山、ルートは増えてくるんだなど実感しました。一緒に付き合ってくれた方々に本当に感謝です。

これで私の一年目は終わり。これから夏に向けて岩登りがまた始まります。よし、二年目もガシガシ登るぞ。



早月小屋にて

行ってますからね」と返す会話を妄想していたのに、おかしい。妄想とは異なる現実を突き付けられ、少しだけ自分がかっかりしていると、後ろから富山湾が見え始めました。そう、海です。群馬県民の特徴だと勝手に自分では思っているのですが、海を見ると異様にテンションが上がります。美しい景色に背中を押され、12時前に早月小屋に到着しました。

テントを張り、昼間から宴会開始。夕方には、同じ日に同じルートで入山し、すでにピークを踏んできた上原さん、島袋さんと合流。メンバーがそろったので五人で記念撮影。我々三人は、翌日ピークを踏んでそのまま下山することに

山登りから学んだ

自然からの贈り物

— 故樋口宗平氏に感謝を込めて —

桐生山岳会 吉田文江

山登りを始めたきっかけは、保育士の学校でワンダーフォーゲル部に入部して以来、独身の時も結婚してからずっと山登りを続けている。仕事も、長期休暇が取れなくなると、辞めて次の職場に転職。おかげで、保育士、登山用具店の店員、介護施設の介護員、介護支援専門員と、年代で転職。いろいろな職業が楽しめた。人生の中で、私にとって影響力があったのが樋口さん。樋口さんが三年前に亡くなるまでの私の二十代から、ずっと、桐生山岳会の春夏冬合宿は一九九九年までいつも一緒だった。私が二十代の頃は、国体の強化合宿のコーチとして、桐生山岳会から佐藤緑さん、壁美和子さんと三人で群馬国体に向けて、トレーニングに励んできた。一九八三年の一月に、富士山を登頂後吉田口の下山途中の八合目付近でアイゼンをひっかけ滑落。七合目

付近で止まり、内臓破裂で腸を20cm切除。三カ月の入院生活となる。

この時の体験が、これからの山登り生活のはじまりとなった。樋口さん曰く、「わしの体験から、病気でない怪我は、必ず治るからそのまま、国体選手に」と関係者に私が出られるようにお願いして、一歩もゆずらなかつた事を後に聞いた。その時のメンバーの佐藤緑さんと壁美和子さんは、樋口さんの言うことを信じて、治るか治らないかわからない私のために、精神的な支えとなって励ましてくれた。手術は成功し、三月に山梨赤十字病院を退院することはできたが、滑落時左膝を打撲し、膝に水が溜まるようになった。この左膝の治療もOBの高木勝子さんが良い接骨院があると言うので紹介してもらい、当時保育士をしており、毎日、保育園のお昼休みになると高木さんが迎えに来てくれて接骨

院へ連れて行ってもらい、三ヶ月間通い続けて完治。勝子さんに感謝している。

その年の八月からチームに復帰。この一連の入院生活や膝が完治するまで、身体の動かない状態から、壊れた細胞が生まれ変わり、再生するまでの感覚を味わったような気がした。それはまるで、滑落時に富士山から産み落とされ、死んでも不思議でないこの状況にいる自分が不思議な力に生かされている。見えない力もあるんだ、意識つてすごいんだと強く思った。

十月の国体に、私が出場できると、信頼して待っていたチームの仲間と樋口さんを始め、山岳連盟

の関係者には、感謝してもらえない。開催地である地元、群馬国体で優勝することができた。自然とは、山とは厳しいもので、課される試練を乗り越えることで人間の可能性を広げてくれた。樋口さんが言った「木村を出場させる」という言葉がなかったら、目標であつた国体優勝を成し遂げることでも、怪我を乗り越えることもできなかっただろう。

私は樋口宗平という人物に出会つたおかげで、山登りを続けることができています。冬・春は富山県大日岳から剣岳の縦走、八ツ峰から剣岳の縦走、五竜岳東面など。夏は、剣・穂高の岩場、黒部上ノ



ハツ峰から剣岳稜線にて 樋口さんと夫と私 1996年1月

廊下や北又谷の沢登りなど、自然豊かな山をたくさん登ってきた。また私の海外登山の夢がひとつひとつ実現したのも彼のおかげである。最初の海外登山のアラスカ・マッキンリー登山時、頬に凍傷を作った。樋口さん曰く「嫁入り前の娘に顔に傷はつけられない」ということで、アタックのメンバーには加えてもらえなかつた。国体の怪我の時の言葉もそうだが、彼の言葉には親心と言うべきなのだろうか。優しさを感じた。そのおかげで二度目のマッキンリー登山は境町山の会のチームに参加でき、登頂させてもらった。その後も群馬県山岳連盟のアンナプルナI峰南壁のメンバー選抜時も樋口さんが推薦してくれた。

樋口宗平という人物に関わつてきて、彼の山に対する姿勢・探究心、様々な一面を見てきた。痔から雪上を真っ赤に染めるほどの出血をしながらも果敢に進み続ける姿。胃潰瘍のため胃の三分の二を切除した後も登山途中の食事ですぐに飯を食べるほどの豪快さ。六〇歳の時、私の夫と行った冬の丸山東壁左岩稜ルート登攀。六〇歳を過ぎても衰えない登山に対する彼の熱意には脱帽だった。そん

* 山岳保険は必携登山装備です

山岳指導員養成講習会を 開催して

登山指導委員会委員長 石 橋 修

指導員の任務

「山岳指導員は、地域・スポーツクラブ・学校登山部門等の指導者として事業計画の運営をする」とともに、子どもから、経験の少ない登山者に登山の専門的知識を生かした指導を行い、あわせて都道府県・市区町村・都道府県市区町村体育協会・都道府県山岳連盟ま

は私の山登りの主軸となる経験であり、樋口さんと過ごした四〇年の歳月の始まりでもある。国体での怪我の経験、樋口さんの背を見て山登りをして来た。大切なのは人を信頼し、自然を信頼し、自然からのメッセージを聞き自分自身の心に忠実に生きることである。それを教えてくれたのは、樋口宗平という人間であり、彼の山に対する姿勢・熱意である。

私はその山に対する熱意をこれからも引き継ぎ、夫と共に山に登り続けて行きたいと思う。



たは傘下の山岳団体が主催するイベントの運営および指導をする。」

二〇一八年度、指導委員会では公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会より委嘱を受け、A級主任検定員の町田幸男さんに全面的にご協力いただき、スポーツ指導者養成講習会及び検定会を実施した。前回の講習会は二〇一一年度に開催しており、群馬県内では七年振りとなる今回は、二十名が受講者として登録した。

指導員には右記のとおり明確な任務が与えられている。資格取得のためには詳細なカリキュラムが定められており、共通科目(今回はNHK学園の通信講座「スポーツリーダー養成講座」を代用)のほか、専門科目として、基礎理論(六時

間)・無雪期技術(十四時間)・積雪期技術(十時間)という実技講習を五日間にわたり受講し、各科目ともに一定程度の成績を収めたうえで検定(論文及び筆記試験)を突破しなければ、晴れて日本スポーツ協会公認の山岳指導員(アルパインクライミング)となることはできない。

加えて今回の講習の目的は、「既に持っている知識を指導者としていかにわかりやすく受講者に伝えるかを学ぶ」ことにあったと言っても過言ではない。仲間内での指導とは異なり、講師となるとどうしても緊張するものである。しかし、人前で話すときにも空中に向かって「ジャガイモ」に話しかけるのではなく、基本は一人ひとりに語りかける姿勢が大切となる。

最初のうちは苦労している受講生も多かったようであるが、回を重ねるうちに慣れてコツをつかみ、ポイントを得た講義が随所で見られるようになった。検定には二十人全員が合格したことをここに報告する。

無事登録が完了すれば、十月には二十名の新指導員が仲間に加わることとなる。指導委員会では安全登山の啓発活動の一環として、毎年登山教室を開催してきた。また今後、日本山岳・スポーツクライミング協会では「夏山リーダー養成講習会」を全国各地の山岳連盟が主体となって開催すべく準備を進めている。当委員会でもこれに応え、新たな仲間とともに更なる安全登山の普及を目指す考えである。

群馬岳連自然保護委員会 平成30年度宿泊研修

自然保護委員会 三 田 治 宣

実施日…平成31年2月24日〜25日
毎年恒例年度末の締めくくりとして宿泊研修を行いました。

朝九時にみなかみ町道の駅「水紀行館」に集合。皆で乗り合わせ、

ノルン水上スキーのリフトを利用して、吾妻耶山ピークハントをしました。コースとしてはグレンデ脇の樹林帯を登るのですが、沢が入り組んでいる所が多くルートファ



山頂にて

インデニングに時間を費やしました。自然保護委員会らしく、皆それぞれの知識を披露しながら歩き、会話と笑いが絶えませんでした。また今回は、ビーコン、プロップ、シャベルを必携とし、実技講習をしました。基本操作を皆で確認しあう良い機会だったと思います。

天気も良くて頂上での見晴らしも良く、内容の充実した山行でした。

下山後は湯檜曾温泉の宿にて机上研修を行いました。講義形式の講習は今回が初めてです。



歩行中

初回の講師として齋藤さんがつとめてくれました。内容は「山と法律」でした。実例をあげての内容は、わかりやすく興味深く聞くことができました。その後懇親会となり、来年度の抱負を語り合いながら夜も更けていきました。

翌日は自由解散となり、各グループでスキーを楽しんだり、雪山登山を楽しみました。この行事は、年度末の締めくくりとして、また委員の結束力を高める機会として続けていきたいと思います。

チャレンジキッズプロジェクト発足五周年

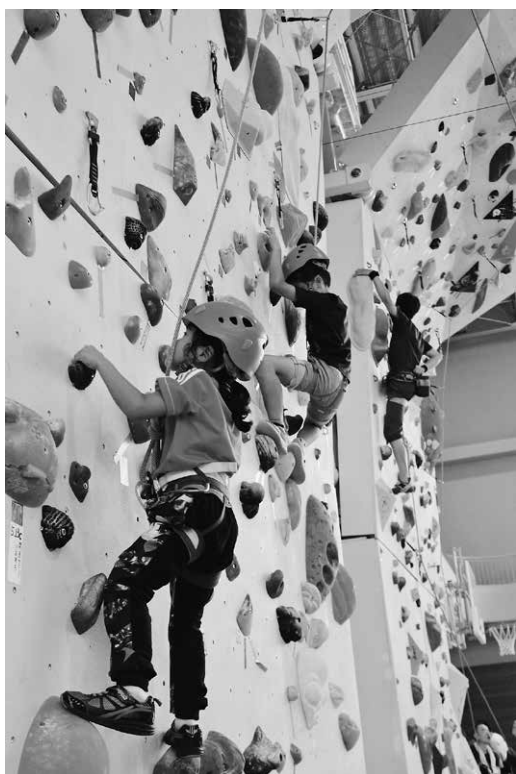
ジュニア委員会 金子一実

チャレンジキッズプロジェクトは平成二十五年九月に発足し第一回は一ノ倉沢、一ノ沢出合までの沢登りで参加人数 27名(キッズ14名、スタッフ13名)から始まりました。以来毎年、春・夏・秋、年三回の教室を五年間継続しています。

二十五年22名、二十六年38名、二十七年28名、二十八年48名(本年度より保護者参加の教室としたため人数が増える)二十九年20名、三十年38名、令和元年五月は24名、八月はキッズ14名、延べ二十一回の教室で参加人数はキッズ158名、保護者47名、合計205名の参加を頂きました。

春に行っているスノーシュー登山は、雪山での登山となるため、装備・天候判断・ナビゲーション・雪上歩行の経験が必要となるため貴重な体験だと思っています。

夏・秋には、谷川岳周辺・赤城



山・日光白根山では自然観察とナビゲーション、特に、1/25000地形図と磁石とスマホで使用するアプリを使い、登山中の現在地点を確認出来るようにし、道迷いにならないよう指導しています。

富な群馬岳連加盟の山岳会員が当たり、歩行技術(スノーシュー・雪上・岩場・悪場・急斜面・緩斜面)・装備・食料・ナビゲーション・天気予報・怪我等の対応・緊急連絡方法などを指導しています。

悪場の通過・岩登り体験では、クライミングボード体験会・自然岩場のクライミング体験を行いそれぞれの感触を味わってもらいました。

指導内容としては、登山経験豊

自然観察では、それぞれの山域特有(気候・地形・植物・昆虫・動物)の説明をしています。興味を持って聞いて貰うのはなかなか大変でしたが、近年では、子供教育に長年携わったスタッフも増



えて、企画の段階から積極的に参加してもらい、細やかな対応も出来てきたと感じています。

参加者に於いては、登山を通して自然に対する関心、考え方、力を合わせて成し遂げる、助け合う、このような経験を活かして楽しく、安全な登山を続けて頂きたいと思っております。

過去五年間の募集状



況はおおむね50%と低めでした。

参加者の多くは、前橋・高崎・渋川市で県央に集中し、母親が自家用車で引率して来るケースが多く、集合場所までの道路状況や走行距離がかなり参加率に影響しているように思えます。赤城山(茶ノ木峠登山)で参加者が増えたのは、一般的に知られていることと集合場所が自宅から近



マッキンリー登山中の小松(左)と三枝(右)

今から三十年前の平成元(一九八九)年三月六日早朝、薄明るくなる中、布団の中で新聞を読んでいた。六時過ぎ、枕もとの電話が鳴る。この東京の旅行社からの一本の電話が激動の数か月の始まりだった。

当時の山田は八〇〇m峰14座全山登山への挑戦中であつた。すでにエベレストを冬、秋、春の三度登頂(三度目は北から南へ縦走)など9座12回の登頂を果たしており、イタリ

アのラインホルト・メスナー、ポーランドのイェジ・ククチカに次ぎ世界で三人目の全山登頂者になるはずであつた。

そのトレーニング、足慣らしとしての「五大陸最高峰の冬期登頂ツアー中」であつた。一九八三年十二月に冬期エベレスト登頂を済ませている者でなければ出てこない発想であつたが、ノーマルシーズン(の五大陸登頂者がすでに何人もおり、自身も前年に135日間で五大陸最高峰登頂を果たしているからこそそのアイディアでもあつた。

私にも声はかかっていたが、資金不足で断念していた。もちろん私が行っても足手まといになることははっきりしているので、カヒルトナ氷河のランディングポイント

いという条件が合ったからだと思えます。

特に、スノーシュー登山では集合場所までが雪道走行が見込まれ

るため、参加率が下がることが見込まれます。そのためか集合場所までの交通負担を軽減するのに観光バス利用等を検討し、交通安全

を確保しながら県内だけでなく広範囲に足を伸ばし色々な山を体験出来たらと考えています。

マッキンリー山田隊遭難から三十年

群馬県山岳連盟会長 八木原 罔明
(元マッキンリー遭難対策本部長)

トのBCまでであったが。

山田はマッキンリーへ向かう前の二月に単独でモンブランに登頂し、アラスカのアンカレジで小松幸三、三枝照雄、BC村長の佐藤俊三たちと合流し、二月十五日にセスナ機で氷河に降り立ち、翌十六日から佐藤を置いて登り始める。

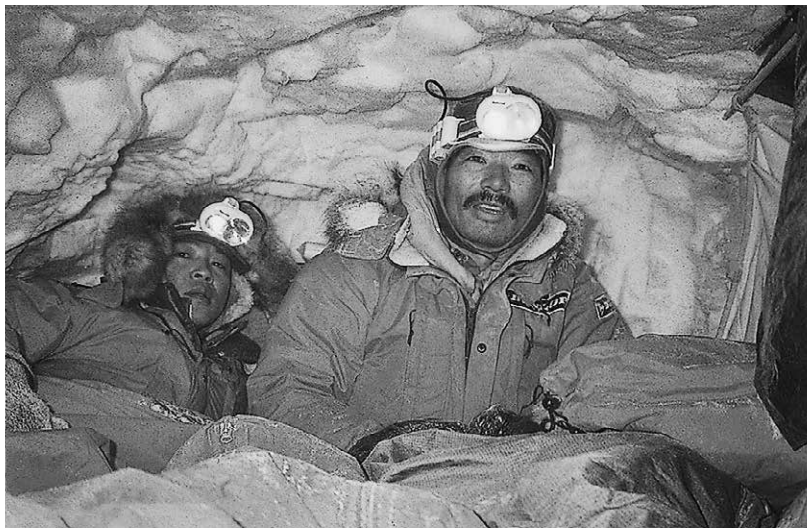
佐藤村長は二十日の交信を最後に連絡が取れず一人悶々とした日々を過ごす。テントと一緒に飛ばされるかと思う猛吹雪の襲来と、登頂後の下山中に山田達と会ったというオーストリア隊が二十五日にBCまで戻ったことで少しは心配が薄まるが、時間は刻々と過ぎ、オーストリア隊の迎える飛行機も来ずに三月を迎えると、不安はますます募る。毎日九時、十五時の交信を試みるが、応答はもてない。

「遭難」の二文字を打ち消しながらも、何かが起こったことを確信する。一刻も早い日本への報告を焦るが、飛行機は飛んでこない。外に捨てたオレンジの皮もまた拾って食べるまでに食料は尽きた。シユラフ

に入りジツとしているしかなかった。三月五日(日本の三月六日早朝)、やっとセスナが飛んできた。タルキートナへ戻る。

三月六日夕、小松幸三が社長を務める東京は新橋のマウンテントラベル社へ行くと四人の山仲間が多勢集まっていた。「状況は厳しいがとにかく三人は生存している」との前提に立つての対応を取ることにする。マスコミの殺到。

四人の登山隊派遣母体はない。四人の関係する組織の有志が集ま



マッキンリー最後の雪洞 小松(左) 山田(右)

り、「マッキンリー遭難対策本部」を設置し、今後の活動の中心とすることにする。

群馬岳連、日本ヒマラヤ協会、法政大学Ⅱ部山岳部OB会、カモシカ同人、GHMJ、第二次RCC、パイネニアソブの七団体である。八木原が本部長となる。

翌七日にはとにかく現地に入送ろう、佐藤俊三村長と合流させようと取るものもとありあえず、宮崎勉と佐藤光由がアンカレジ、タルキートナへ飛ぶ。

そして悪夢のような一か月余に及ぶ焦燥と不安、絶望、搜索

の中止決定、三名の遺体発見、搜索中止の撤回、十九名の収容隊による遺体収容、遺骨の帰国、葬儀、三人を偲ぶ会とまるで戦争のような日々が過ぎた。

寄せられた支援金は約二〇〇〇人と数十団体からの三、一〇〇万円超。報告書「マッキンリー山田隊 極北の烈風に死す」を編集しながら現日本ヒマラヤ協会長の山森欣一と私が話した



テント内でサーモンステーキを焼く

見果てぬ夢、ままならぬ人生の非情さ。「山」は山田や我々に活躍の場を与え、我々に夢を見させてくれた。したが、我々からそれを見続ける、見守る楽しみも奪った。先鋭登山家の死は壮烈であるがゆえに悲しい。第一線登山の厳しさ、大自然の容赦の無さに慄然とする。

自らをより苛酷な世界に投げ、壮絶な闘いの末に勝利しても何も得られない。敗れば自らの命を奪われる。そんな無償の戦いの中に登山家は見果てぬ夢を描き続ける。追い求め続ける。

地球を駆け巡り、自らの夢の一つ、また一つヒマラヤの、世界の高峰に刻み続けた彼らはその途中で斃れたにしても幸福な男たちだったかもしれない。否、幸福な生涯だったと私は思いたい。夢は何時までも、あくまでも夢である。果てしない。

一つの夢を果たせば、また次なる夢がより大きく、より高く、より困難に立ちふさがり、彼らの前に聳え続けたに違いない。安らかに眠れ。



株式会社エーアールアイ
東京都練馬区上石神井 3-18-1
TEL 03-5991-4638

弱電工事承ります。
電話工事、ネットワーク工事及びセットアップ(LAN 及び Wi-Fi 環境)、
TV アンテナ及びケーブル工事
パソコンで悩んでいませんか?
ソフトの使い方はわかりませんが、ハードの悩みは相談してください。
(難しい故障の場合は外注となります。)

ミヤマネットワーク

代表 佐藤 光 由
群馬県前橋市高花台 1-6-5
電話 027-269-1143 携帯 090-8842-2158



(有) 山とスキーの店 石 井

DreamBOX

伊勢崎市宮子町 3448-2
TEL 0270-21-8025 FAX 0270-21-8026